

主題・要旨をとらえるということ

新潟大学
足立 幸子

1 はじめに

PISAの読解力国際専門委員会(reading expert group)の一員として、読解リテラシーの枠組みを検討するという仕事をしたことがある。その時に思ったことは、我が国の国語科教育における「読解力」とらえ方は、ぜひふん特殊だということだ。具体的に、そのことを指摘したい。

図1は、PISAの二〇〇〇年・二〇〇三年・二〇〇六年調査で用いられた読解リテラシーのアスペクトである。一連の読書過程の中で、読んでいる人の頭には様々なことが生起するわけだが、それぞれのアスペクトは別々に測定可能であると考えるのである。それぞれのアスペクトは、特にどれが難しくどれが易しいということはない。難易度は、個々のテキストや問い方によって変わってくるものであるし、実際には生徒の通過率によって

測られる。これと、我が国の国語科教育における「読解力」とのとらえ方の違いを、ひとつ例を出して比べてみよう。

2 「幅広い一般的な理解の形成」から、主題・要旨をとらえる指導を見直す

注目したいのは、図1の「幅広い一般的な理解の形成」である。これは、「筆者がこの文章で言おうとしていることは何ですか」「この文章の最大の目的は何ですか」というような、テキストの主題や要旨をつかむことができるかを問うものである。これは、「情報の取り出し」や「解釈の展開」や「テキストの内容の熟考・評価」あるいは「テキストの形式の熟考・評価」とは関連させずに、測定できるものとしている。

ところが、従来の国語科授業における主題・要旨の指導は、個々の情報を取り出し、解釈をさせ、丁寧に読み進めていくことで、初め

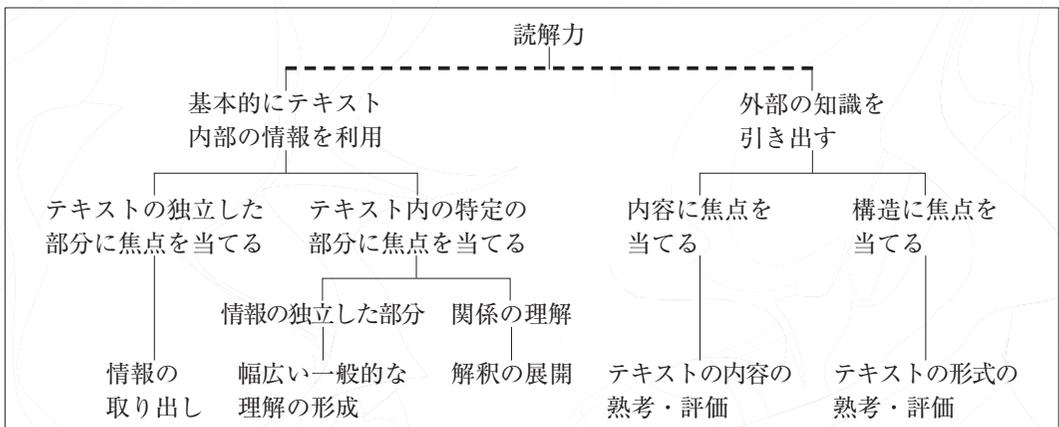


図1 読解リテラシーのアスペクト

(国立教育政策研究所監訳『PISA2006年調査 評価の枠組み OECD生徒の学習到達度調査』ぎょうせい 2007年 p.44より)

て主題が分かってくるという前提で行われることが多かった。実際の授業では、場面・段落ごとに大事なキーワードを押さえたり、大意をまとめたり、見出しを付けたりして、数時間を過ごした後、やっと主題・要旨をとらえる授業に入るのだ。これは、我が国の国語教師の①主題・要旨の前提には細かい情報が読めていなければならない、②主題・要旨は難しく、情報の取り出し・解釈は易しいという読解力観に基づいている。それぞれのアスペクトは個々に測定可能で、難易度はアスペクトによらないとするPISAの読解リテラシーとは、異なるのである。そして、実際のところ、このような長時間をかけての主題指導にたどりついた頃には、教材文に対して飽きを感じたり、疲弊してしまったりする子どももいる。主題・要旨をとらえるのに重要なことは、そういう個々を踏まえることではなく、むしろ大観することであり、大観することとは決して難しいことではないということ、私たちはPISAの読解リテラシーから学ぶべきではないか。

3 読書指導で、「幅広い一般的な理解の形成」の力を高める

このような我が国の教師が持っている読解力観は、短いテキストを長時間かけて読むと

いう我が国の国語科授業から生みだされたものである。そうであるとするならば、逆に、長いテキストを短い時間で読むという場面を授業の中に作り出せば、大観して「幅広い一般的な理解の形成」を行う力は自然に身につけられるはずなのだ。そこで、私が「短時間読書」「点検読書」と呼んでいる読書指導の方法を、ここで紹介してみたい。

「短時間読書」は、たとえば七分間など時間を決めて、その時間内に筆者が言おうとしていることは何か、その本が書かれた目的は何かを読みとらせるという読書指導の方法である。二人組みで、読んだことのない別々の本を読ませる。七分経ったのち、読みとった主題・要旨を相手に話させるのである。白い紙を一枚渡しておき、メモはとつてもよいこととするが、決して主題や要旨を紙に書いてはいけない。そうすると時間がかかってしまうからである。短い時間を最大限に生かして本を大観するという経験を積ませることが、この指導法で最も重要な点である。

「点検読書」は、アドラーの『本を読む本』に書かれている「点検読書」から発想を得て、私が主に大学のゼミの中で行っている読書指導法である。まず学生に読む目的（読みたいこと）を決めさせる。そして、その本を点検させて、自分の目的から考えればその本をこ

れから時間をかけて読む価値があるかどうかを判断させるのである。私はこれを卒業研究の指導で用いているが、中学生でも十分に使用できる。何か読みたいことや知りたいことを先に決めさせ、そのことが中に書かれている読んだり引用したりする価値があるかどうかを点検させればよいのである。このように、短い時間で、長めのテキストを大観するという経験を積ませる必要がある。

4 おわりに

以上、PISAの読解リテラシーをもとに、主題・要旨をとらえるということについて、我が国の読解力観を検討してみた。「短時間読書」も「点検読書」も、多読をベースにした教育が実施され、読解リテラシーで高得点をあげている国々では、普通に行われている指導であると想像する。これからもこの連載で、PISAを鏡として我々の読解力観や読書指導を問い直し、読解リテラシーをつける読書指導の方法を、紹介してみたい。

あだち さちこ 新潟大学教育学部准教授。PISA 2009読解リテラシー国際専門委員会委員。読書の指導法、評価の研究を行っている。